

総研大 アジア冬の学校

鈴木 康 浩

総合研究大学院大学（総研大）・核融合科学専攻は、総研大アジア冬の学校を2019年1月21日から25日までタイのバンコク近郊で開催しました。総研大アジア冬の学校は、近年、経済発展が目覚ましい東南アジアの優秀な学生を多数招へいすることを目的として、東南アジアの国々で開催することとしています。これまでに2回、タイにて開催しており、昨年度からはタイ国家原子力技術研究所（TINT:Thailand Institute of Nuclear Technology）が主催しているASEAN School on Plasma and Nuclear Fusion（ASPNF）と共催の形で開催しています。このことにより、核融合エネルギーに興味を持つ優秀な学生を多数招待することが可能となりました。これは、2016年度に、タイ・チェンマイ大学、TINTと核融合科学研究所との間で締結した、研究と教育に関する学術協定を活用することにより可能となったものです。

本年度の冬の学校は、タイ・バンコク郊外のマヒドン大学サラヤキャンパス内を会場として開催されました。理学部材料工学科の講義室を会場として使用し、機材等も最新のものが整備された素晴らしい施設でした。昼食も会場内で全員一緒に取ることができ、まさに1週間寝食を共にし、核融合を学ぶことができる機会となりました。今回は、タイ、ベトナム、インドネシア、ネパール、インド、パキスタン、フィリピン、日本の計8か国から合計62名の参加がありました。

当研究所からは山田弘司教授、磯部光孝教授、大館暁教授、後藤拓也助教と筆者の5名が講師として参加しました。また、総研大生が2名参加し

ました。今回の冬の学校では、総研大・核融合科学専攻として、60分の基調講演、90分の講義を2コマ、60分の講義を1コマ実施しました。60分の基調講演においては、山田教授から日本の核融合研究開発に関する現状報告がなされました。総研大の講師陣からは、プラズマ・核融合の基礎からシミュレーションや計測についての実践的な講義、また、核融合工学に関する講義などが行われました。ASPNF側が企画した講義としては、タイ、フランスなどの核融合研究開発の現状、更にフランス・WEST実験装置からの実況中継、チェコ・プラハ工科大学に設置されているGOLEMトカマク装置実験を活用した遠隔実験演習などが行われました。

参加した学生は大変熱心で、活発な質疑応答が行われたほか、講義時間外にも多くの学生が質問を寄せるなど強い意欲を感じました。総研大への進学についても多数の質問を受けました。今後、多くの学生が核融合科学専攻に志願してくれることを願っています。マヒドン大学がありますバンコク郊外・サラヤは都市部であるにもかかわらず多くの自然が残る地域です。素晴らしい環境の下で冬の学校を開催するにあたり、TINTとマヒドン大学のスタッフ及びサポート学生の皆様には親身にご協力いただきました。中でもTINTのThawatchai Onjun常務副理事、Roppon Picha研究員、マヒドン大学のSomsak Dangtip准教授に深く感謝いたします。

（核融合理論シミュレーション研究系 准教授）



図1. 核融合科学研究所山田教授による基調講演



図2. 演習における学生同士の議論。様々な国々からの参加学生が、英語で議論を戦わせます。